

21世紀のための友情計画
アフターケア調査チーム報告書
(1990年度)

平成3年10月

国際協力事業団

青 業
JR
91-711

RY

JICA LIBRARY



1095186(1)

23151

21世紀のための友情計画
アフターケア調査チーム報告書
(1990年度)

平成3年10月

国際協力事業団

国際協力事業団

23151

はじめに

この報告書は、昭和63年度より開始された「21世紀のための友情計画」アフターケア調査チーム派遣に係る、平成2年度実施団体の報告をとりまとめたものです。

アフターケア調査チームは、ASEAN青年の日本への招へいをもって開始された青年招へい事業を、双方向の交流に発展させ、彼我の青年の永続的な友情関係を樹立することを目的として派遣しており、平成2年度は、6チーム合計30名を、ASEANのみならず韓国へも派遣することができました。

この報告書が、関係各位のご理解を一層深め、今後同チームに参加される方々の参考となれば幸いです。

平成3年6月

研修事業部長
諏訪 龍

目 次

はじめに

I 概要報告	1
II 国別報告	
1. ブルネイおよびシンガポール	3
2. マレーシア	33
3. タ イ	71
4. 韓 国	105
5. フィリピン	133
6. インドネシア	155
III 参考資料	
1. 派遣要領	183
2. 標準日程表	186
3. 実施分担表	187
4. 参加候補者推薦要領	188
5. 業務実施契約書	193
6. 留意事項	199
7. 報告書作成要領	201
8. 実務担当者会議開催案内	202
9. 選考委員会開催案内	203

ブルネイ



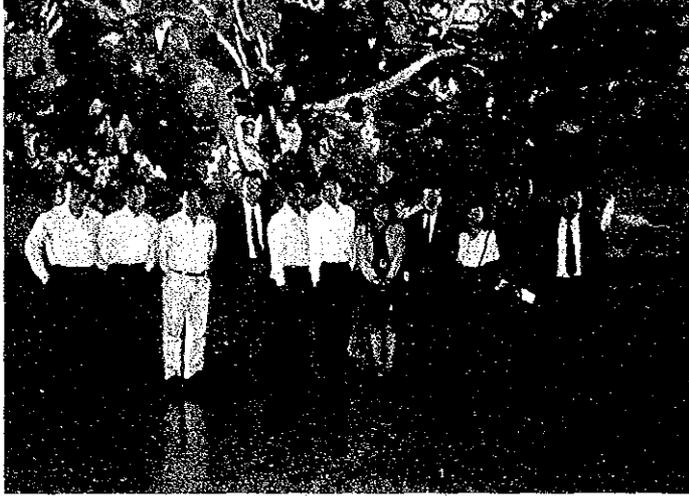
日本大使館表敬

セミナーにて



開発省の住宅開発現場訪問

シンガポール



社会開発省訪問

ホームビジット



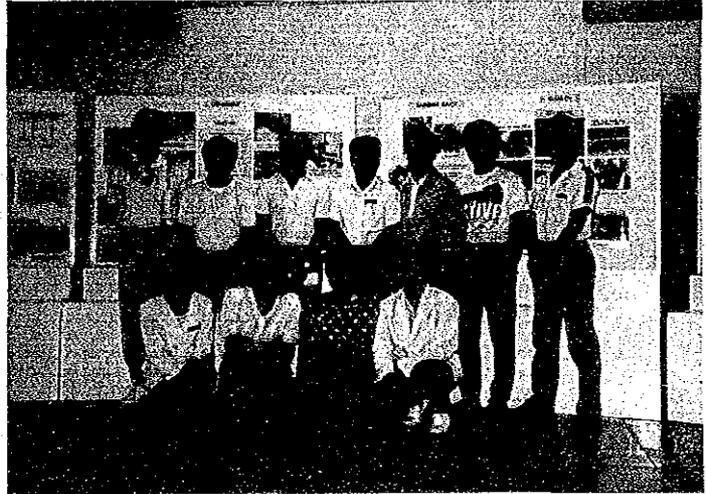
チャンギ空港にてお別れ

マレーシア



人事院表敬

農業試験場にて



ホームビジットで一息

タイ

総理府青少年局表敬



チェンマイ大学にて

チェラロンコーン大学にて



韓国

教育部表敬



交歓会

オリンピック公園にて



フィリピン



外務省表敬

同窓会役員と懇談



ホストファミリーとの別れ

インドネシア



青年スポーツ省表敬

グヌン第5小学校訪問



セミナー参加者と

I 概要報告

I 概要報告

1. 目的

青年招へい事業で我が国での交流に参加した日本青年等を ASEAN 諸国等に派遣し、ASEAN 青年の本邦招へいをもって開始された本事業を双方向の交流に発展させ、専門分野別に本事業参加経験者の日本理解及び研修成果を更に深めるとともに、再交流を促進することによって、来日時に形成された友情を発展させ、永続的な友情関係を樹立することを目的とする。

2. 派遣対象者

都内分野別プログラム関係者、地方分野別プログラム関係者、共通プログラム関係者等
「21世紀のための友情計画」日本側交流関係者

3. 派遣国、チーム編成等

ASEAN 6 カ国及び韓国に対し、1 カ国につき 1 チーム（ただし、ブルネイとシンガポールはあわせて 1 チーム）各 5 名、合計 6 チーム（30 名）を派遣。

チームの編成は、チームリーダー 1 名と団員による。

4. 派遣日程等

派遣国	実施協力団体	派遣期間	参加者						
			実施協力団体	地方受入団体	共通プログラム	合宿セミナー	ホストファミリー	地方公共団体	合計
ブルネイ および シンガポール	国際交流サービス協会	平成 2 年 12 月 5 日～ 12 月 14 日	1 名	1 名	1 名	1 名		1 名	5
マレーシア	全国農村青少年 教育振興会	平成 2 年 12 月 12 日～ 12 月 21 日	1 名		2 名		2 名		5
タイ	日本友愛青年協会	平成 2 年 12 月 12 日～ 12 月 21 日	1 名	2 名			1 名	1 名	5
韓国	世界青少年交流協会	平成 3 年 1 月 30 日～ 2 月 9 日	1 名	1 名	1 名	1 名	1 名		5
フィリピン	日本青年団協議会	平成 3 年 2 月 19 日～ 2 月 28 日	2 名	1 名		1 名		1 名	5
インドネシア	勤労厚生協会	平成 3 年 3 月 7 日～ 3 月 16 日			1 名	2 名		2 名	5
合計			6 名	5 名	5 名	5 名	4 名	5 名	30

<註>共通プログラム関係者：武道館関係者 1 名、サービスセンター 3 名、体験的日本語学習 1 名
地方公共団体：栃木県湯津上村住民福祉課、秋田県農政部農業技術開発課、山形県企画調整部企画調整課、愛知県労働部労働福祉課、群馬県労政課労働人係、各 1 名

II 国 別 報 告

ブルネイおよび
シンガポール

平成2年12月5日～12月14日

社団法人 国際交流サービス協会

1. 調査チーム派遣概要

1-1 調査チームの構成

	氏名	年齢/性別	現住所/所属先
チームリーダー	橋本佳子	25 女	東京都八王子市散田町2-52-8 (株)国際交流サービス協会 中央実施協力団体の実務担当者
	本人の訪問国との関わり：ブルネイ教員・学生（1989） シンガポール教員（1989, 1990） シンガポール公務員（1989, 1990）, ASEAN混成公務員Ⅱ, Ⅰ（1989, 1990）		
メンバー	内山選良	31 男	東京都品川区中延3-5-10-305 (株)国際協力サービス・センター JICAコーディネーター、共通プログラムの担当者
	本人の訪問国との関わり：過去、多数のシンガポールグループのコーディネーター。現在、全グループをカバー。		
メンバー	斎藤文江	28 女	東京都練馬区中村南3-21-3 東京都立学校講師 合宿セミナー日本青年代表
	本人の訪問国との関わり：シンガポール教員合宿（1989） ブルネイ教員・学生合宿（1989） ASEAN混成公務員Ⅰ合宿（1990）		
メンバー	平澤文夫	37 男	栃木県下都賀郡野木町友沼889 (株)栃木県国際交流協会 業務課長 地方実施協力団体
	本人の訪問国との関わり：ブルネイ教員・学生（1989） ASEAN混成公務員Ⅰ（1990）		
メンバー	谷田雅洋	41 男	栃木県那須郡湯津上村大字 佐良土698 湯津上村役場住民福祉課福祉厚生係長 ホームステイ受入家庭の代表者
	本人の訪問国との関わり：ブルネイ教員・学生（1989） ASEAN混成公務員Ⅰ（1990）		

※ブルネイ・ダルサラーム国とシンガポール国の両国を組み合わせたアフターケアとなったため、調査チームの構成も、両国ともに関わった経験のあるメンバーを選出した。

1-2 調査日程

1-3 主要面談者

月日	時間	日 程	主要面談者
12/5 (水)	11:30 13:30 19:35 21:25 23:30	成田空港集合、結団式 成田空港発 (JL719) シンガポール チャンギ空港着 シンガポール チャンギ空港発 ブルネイ バンダル・スリ・ブガワ ン空港着	* 橋本東一JICAブルネイ事務所長 出迎え * AWANG HJ MOHD TAIB BIN HJ OTHMAN : Chief Co-ordinator of The Friendship Program for the 21st Century. 出迎え
12/6 (木)	01:00 08:30 09:30 10:45 12:15 14:30 15:30 19:30	アングス ホテル着 同窓会事務局長 Mr. TAIBによる ブリーフィング JICAブルネイ事務所訪問 ナショナル・スタジアム 福祉青年スポーツ局長主催昼食会 於) ナショナル・スタジアム 日本大使館訪問 ヒストリー・センター見学 館長、職員と質疑応答 同窓会主催夕食会 於) Mr. TAIB家	* AWANG HJ MOHD TAIB BIN HJ OTHMAN コーディネーター (3名) * DYG SAADIAH HAJI AHMAD : Ministry of Finance . * DYG JAINAH BT ABD LADI : Housing Development Department * MD DAUD HAJI ABD HAMID : Ministry of Development . * 橋本東一所長 * ABD GHANI BIN HJ MD ALI : Assistant Studium Manager . * PG ASMALEE PG AHMAD : Deputy Director , Welfare Youth & Sports Department , Ministry of Culture Youth & Sports . * 米田隆一参事官 * 橋本JICA所長 * 吉田重信特命全権大使
12/7 (金)	09:30 11:30	同窓会との意見交歓会 テーマ: 「21世紀のための友情計画 の効果と展望」 於) ナショナル・スタジアム 同窓会青年との昼食会 於) ナショナル・スタジアム	* 同窓会青年20名

月日	時間	日 程	主要面談者
12/7 (金)	14:30	ホームステイ	
12/8 (土)	08:00	ホームステイ先からホテルへ集合	
	09:00	大蔵省経済企画庁の講義	* PG HARUN B. PG HJ ALIUDDIN
	09:45	講師との懇談会	* HJH ROSNI HJ TINGKAT : Senior Economist, Economic Planning Unit
	10:30	文化・青年・スポーツ省のブルネイ 伝統舞踊、音楽の講義と実演	* HJ MOHD HJ MOKTI
	12:30	同窓会メンバーとの昼食	* OSMAN HAJI SALIM : Ministry of Development .
	13:30	ハンディ・クラフト・センター 見学	
	14:30	開発省住宅整備公団 現場視察 (帰国青年活動現場視察)	* ANG MOHD TAIB HAJI MOHD SAID : SMB, Housing Development Dept., Ministry of Development .
19:30	フェアウェル・パーティ	* 同窓会メンバー 約30名 * 米田参事官 * 橋本JICA所長	
12/9 (日)	09:00	ブルネイ バンダル・スリ・ベガワ ン空港発 (BI421)	* 橋本JICA所長 見送り * MR. TAIB 見送り * 同窓会メンバー、ホスト・ファミリー 見送り
	11:05	シンガポール チャンギ空港着	* 同窓会メンバー 出迎え * 有次JICA職員 出迎え
	12:30	オーチャードホテル着 石田JICA所員よりブリーフィング	* 石田幸男JICAシンガポール所員
	午後	自由	
19:00	アフターケアチーム主催夕食会	* MR. CHRISTOPHER CHAN:SAJAFJA会長 * 柳井啓子三等書記官 * 倉重高子専門調査員 * 星達雄JICAシンガポール所長 * 同窓会メンバー20名	
12/10 (月)	10:00	JICAシンガポール事務所訪問	* 星達雄JICAシンガポール所長
	11:30	日本大使館訪問	* 長塚徹一等書記官

月日	時間	日 程	主要面談者
12/10 (月)	14:00	外務省ASEAN局長表敬訪問	* MR. TOH HOCK GHIM : Director-General, Asean National Secretariat, Ministry of Foreign Affairs.
	15:00	人民協会訪問 概要説明, 意見交歓会	* MR. GOH CHIM KHIM : Assistant Director (Youth), People's Association.
12/11 (火)	10:00	社会開発省訪問 概要説明, 意見交歓会	* MR. JEREMY TAY BONG HUA : Head Training, Social Defence & Community Relations Division, Ministry of Community Development.
	12:00	同窓会長との昼食	* MR. CHRISTOPHER CHAN : President of SAJAF A.
	14:00	タウン・カウンシル訪問 概要説明, 質疑応答	
	15:30	現場視察	
	16:00	コミュニティセンター訪問	
	19:00	星JICA所長主催夕食会	* 星JICA所長
12/12 (水)	全日	自由行動	
	夕方	ホーム・ビジット	
12/13 (木)	全日	自由行動	
	19:00	同窓会主催夕食会	* 星JICA所長 * 石田JICA所員 * MR. CHRISTOPHER CHAN * 同窓会メンバー15名
12/14 (金)	08:40	シンガポール チャンギ空港発 SQ012	* MR. CHRISTOPHER CHAN 見送り * 同窓会メンバー10名 見送り
	15:55	成田空港	
	17:00	解散	

2. 調査の要約

アフターケア調査の目的の一つに、帰国青年同窓会のフォローアップがあるが、ブルネイダルサラーム国とシンガポール国は、特に同窓会活動が活発な国であり、今回の訪問はこの二国に対するアフターケアになったことを、JICA から説明を受けた。

そのため、当調査チームは以下の目的を持って調査を行った。

- (1) 本事業参加経験者（帰国青年）との再交流による、友情の発展。
- (2) 調査チームメンバーによる各国の実態の把握。
- (3) 今後のプログラムのための、相互意見交換。

これらの目的は、ほぼ達成されたと思われる。ブルネイ、シンガポール両国とも、短い滞在日数にも関わらず、内容の濃いスケジュールであり、大変有意義なプログラムであった。特に、ブルネイの意気込みは相当なものであり、昨年度のアフターケア報告で見られた、目的や趣旨の無理解は感じられなかった。反対にシンガポールでは、JICA 事務所を始めとして、「21世紀のための友情計画」と本調査の目的や事業内容が理解されていなかったのは、予想外であり残念であった。しかし、我々の意向を迅速な対応で受けて下さった JICA 事務所と同窓会の協力体制と組織力に改めて驚かされた。

また、国土が小さいからといえども、二国のアフターケアは日程的にも体力的にも辛いものがあった。しかし、あらゆる方々の御尽力により当調査が成功したことに、感謝を申し上げたい。

3. 現地活動報告

3-1 表敬・訪問先における意見交換内容

〈ブルネイ・ダルサラーム〉

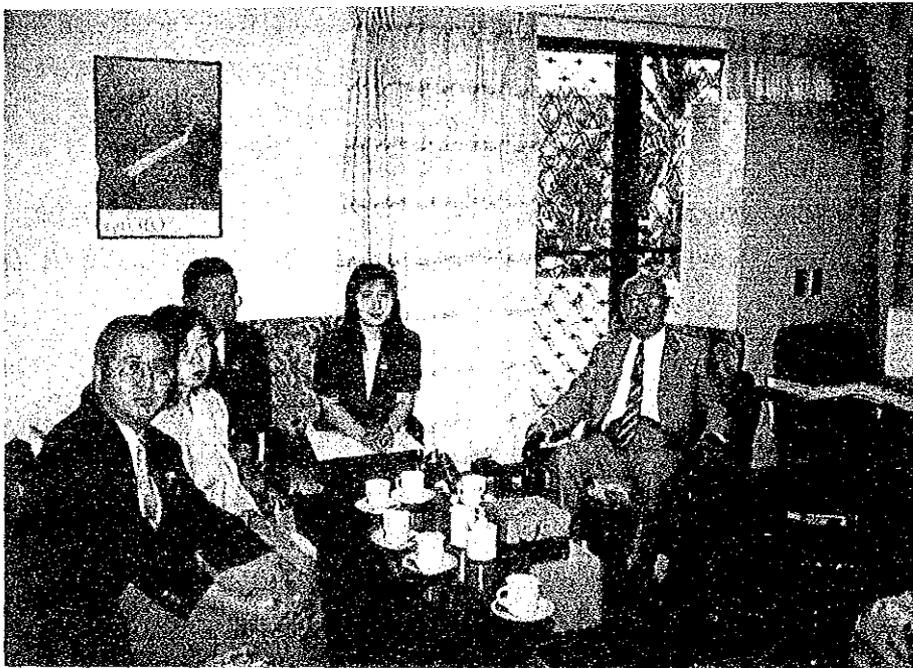
(1) 同窓会事務局長タイブ氏によるブリーフィング

前日、深夜にバンドル・スリ・ブガワン空港に迎えてくれ、面識済みであったため、最初から打ち解けた状態で、日程説明を受けた。実質3日間のスケジュールであるが、こちらの希望や興味を組込んであり、細部にわたり配慮の行き届いたプログラムと認識した。我々5人のために3人のコーディネーター（サーディアさん、ジャイナさん-女性。ダウドさん-男性）をつけてくれた。彼らは本年度のテーマAグループの参加者である。ブルネイでの全日程にはいつもタイブさんと3人のコーディネーターが同行してくれた。

(2) JICA ブルネイ事務所

橋本所長より、日本のブルネイへの協力・機能・活動状況と、ブルネイの現状（主に財政面の問題点）、ASEAN 諸国との係わりについて説明をうけた。問題点として、①石油・天然ガスへの経済依存。97.8%の収入は石油・天然ガスの採掘権に基づくものである。現在は安定した経済を維持しているが、これらの天然資源以外に見るべき産業がない。②労働人口が、86,400名（1989年）の小国であり、個人経営が多く企業経営が成り立ちにくい上に労働人口の50%弱は政府の雇用であり、その給与支出合計は、海外投資・国内設備投資にかかる額とほぼ等しい。③技術者や医者等（重要ポスト）は外国人労働者が占めている。

各訪問先への事前情報として内容、視点とも大変興味深く、参考になるものであった。



(3) ナショナル・スタジアム、スポーツ医療研究センター (National Stadium, Sports Medicine & Research Centre)

帰国青年の活動現場見学である、国立競技場では1988年のASEAN混成公務員グループ参加者のGHANIさんが案内してくれた。

収容人数3～4万人といわれるこの国立競技場は、首都郊外の青い空、丘陵の緑にマッチして美しい景観の中にある。1984年のナショナル・デイで初使用され、皇室観覧室

も備えた最新の競技場である。数日前には学校生徒、障害者の競技大会に使用されたそうである。しかし、競技場の構造上の欠陥が出始めており（10 cm以上の地盤沈下が発生）、この競技場での公式記録への影響、強いてはASEAN 競技会でのブルネイの立場などの問題点が語られた。

併設のメディカル・センター、リサーチ施設、ジムでは、テクニカル・スタッフに白人やシンガポール人が目立った。運動生理学に基づく保健指導処理施設としての機能もっている。この施設は、予約制であり、主に運動関係者のための施設という点や、キャバシテイ、設立意図からしても、国の若さ、運動医療への関心度を伺わせる。最新測定設備により、団員数名がコンピューターチェックをしてもらい、その結果が一般人にも理解しやすい文章表示で表された。

(4) 福祉青年スポーツ局長主催昼食会

「21世紀のための友情計画」の担当局である、文化青年スポーツ省福祉青年スポーツ局長のベンギラン・アスマリー氏の主催された昼食会が、ナショナル・スタジアムの中のゲスト用のレストランにて行われた。参加者は他に、福祉青年スポーツ局 副局長、日本大使館から米田参事官、橋本 JICA 所長、タイプ氏等関係者と我々団員であった。ベンギラン・アスマリー氏から、当事業における効果やブルネイ政府の期待が話された。次代を担う多数の青年達が、長期間日本を訪問し、草の根レベルでの交流ができるこの事業は半永久的に続けて欲しいし、反対に日本からブルネイを訪問する人々をさらに積極的に受入れたいと話された。

(5) 日本大使館

約一時間の吉田大使との表敬訪問では、このアフターケアプログラムの主旨、「21世紀のための友情計画」の内容と効果、同窓会のブルネイにおける活動状況をあわせて述べ、それに対し、大使からは日本とブルネイの相互理解に大変有意義であるので、引き続き今後の活動に期待されると話された。

(6) ブルネイ歴史センター (Brunei History Center)

イスラム教を中心としたブルネイ王国の成り立ちと歴史について、説明を受けながら見学した。15世紀第5代サルタン時代には、マニラからボルネオ島北岸一帯を支配する広大な国家となったが、16世紀以降は英国の進攻により支配地が大幅に縮小されたが、残った領土内に多量の天然資源の埋蔵が判明し、現在の発展に多大な影響を与えている。

サルタンの系図に沿って、西洋人類学的見地にたった回教の歴史解釈と、ブルネイ独自の解釈の比較、相違を交えながら興味深い説明をうけ、質疑応答を行った。

(7) 大蔵省経済企画局の講義 (Lecture by Economic Planning Unit)

大蔵省経済企画局 (EPU) の組織の構成について説明を受けた後、同局次長からブルネイ経済の現状に関する講義を受けた。

① EPU の組織構造 (Structure & Organization of EPU)

PG HARUN B. PG HJ ALIUDDIN により、講義を受けた。内容は以下のとおりである。

経済企画局は 1974 年に設置され、独立前は総理府に属し、1984 年の独立後は大蔵省に属することとなり、現在に至っている。主な役割は企画・年間の活動計画・基盤整備・調査研究等 7 つある。また組織は目的に即して計画課・調節及び設備課・コンピュータ管理課・貿易管理課等 7 つの課に分かれる。

② ブルネイ経済と国家開発計画

次に、女性のエコノミスト、HJH ROSNI HJ TINGKAT により、ブルネイ経済、特に国家開発計画と今後の見通しについて、講義を受けた。

ブルネイ経済は石油・天然ガス等豊富な天然資源により支えられており、経済収入の 60% 強を占めている。ブルネイ経済の計画的発展のためナショナルコミッティーが組織されており、同コミッティーの下 1953 年から 5 年毎の経済計画が定められ、これまで第 1 次計画 (1953 - 58 年) から第 5 次計画 (1986 - 90 年) が実施され、来年度から第 6 次計画がスタートの予定である。

第 1 次 5 ヶ年計画 (1953 - 58) は石油地域と首都を繋ぐメイン・ロードの建設にあてられた。

第 2 次 5 ヶ年計画 (1962 - 66) は、軍事予算は含まれずに、生活向上にあてられた。最初の 2 つの開発委員会は第 3 次 5 ヶ年計画が完了すると、解散された。1966 年から 1974 年の間には開発計画は無く、この間、サルタンの指示により、第 3 次 5 ヶ年計画が考えられ、1974 年の経済企画局の設立の前身となった。

第 3 次 5 ヶ年計画 (1975 - 79) では、EPU が各公共や民間関係部門からの情報をベースに 10 の経済関連セクターを設立した。

第 4 次 5 ヶ年計画 (1980 - 84) は、ほぼ第 3 次 5 ヶ年計画と同じものであり、第 3 次計画でまだ達成されていない部分が、第 4 次にもちこされた。この時、計画委員会は、国家開発計画委員会に改名された。

第5次5ヶ年計画（1985 - 1990）は、独立後初めて、1984年に大蔵大臣の指揮の下で、考案された開発計画であった。この計画では、国家開発委員会の下に、8つの小委員会が設けられ、その各小委員会は各省庁の関係部局の常設機関となった。

第6次5ヶ年計画（1991 - 95）は、1991年の1月から開始される予定である。この第6次国家開発計画委員会は、大蔵大臣を中心として、大蔵次官、常設機関、EPU局長、石油局、JKR、財務局からのメンバー構成である。

ブルネイ経済の中心は、石油と天然ガスであり、それはGDPの60%を越え、ほぼ全輸出を占めている。近年、ブルネイはアメリカ合衆国や英連邦への輸出むけの衣料工場を3つ作り始動しているが、それはまだ、日本の厚い貿易障壁を貫けない状況である。

総人口は256,000人でサービス業等第3次産業の就業割合が高く、政府が激励する第1次・第2次産業の就業者が少ない。労働力の1/3を外国人（GUEST WORKER）に頼っておりこのことが、最近の借家人口の増加に繋がっている。GDP（国内総生産）は過去6年間微増であるが、1990年は中東情勢不安の影響による石油等の輸出増が期待できるのでかなりの増加が見込まれる。（1990年のインフレ率は3.3%である。）石油・天然ガス等豊富な天然資源によって得られる外貨収入の2/3を海外投資に振り向けており、ブルネイをファイナンシャルセンターにすることが国の目標である。さらに、農業、林業、漁業部門の発展を押し進めており、第5次5ヶ年計画による、米・養鶏・鶏卵部門での自給自足に力を入れている。

以上の講義により豊富な天然資源により得られる外貨収入の運用により支えられているブルネイの経済概況が浮彫りにされたが、過度な海外投資による財テク経済の運用は世界経済のリセッション等外部要因に左右される脆弱さをも合わせもっているのではないかという質問に対して、そのことは充分認識しており、天然資源のみではなく多様な部分から収入が得られるべく産業基盤の整備に力を注いでいるとのことであった。

また、土地に余裕があるので道路建設等社会資本の整備を促進していくとのことであり、日本の技術援助にも大きな期待を抱いているとのことである。

(8) 文化青年スポーツ省のブルネイ伝統舞踊、音楽の講義と実演

ブルネイの文化・青年スポーツ省が管轄している同センターは、1984年の独立前、英国の保護領のときの英国人邸宅を独立後施設の一部を改造し、現在カルチャーセンターとしてのブルネイの文化に関する事業を掌り振興等を図っている。文化セミナー、シンポジウムなどにも使用されている。又同センターでは、国の伝統的な文化保存、研究に努めている。踊りや音楽的なものは、特に重視している。

ブルネイは商業化された芸能等はないために、すべて国レベルで保存を図っているため、同センターでは伝統芸能保存の人材養成を重要な事業としている。

同センターでは担当者の説明により国の伝統的踊り（ダンス）と音楽を鑑賞した。踊りは、賓客に食事を差し上げ、もてなす様子、王様の様子を表現したものである。音楽は、伝統的な打楽器を主とし、静かなメロディーを奏でていた。

この踊り（ダンス）と音楽を保存するために、60名のスタッフがいる。最近、他の国々の芸能を取り入れた踊り等を創作し、海外交流を図っている。カナダ、ドバイ等で文化交流を行ったそうである。

鑑賞後、同センターのスタッフで「21世紀のための友情計画」参加メンバーと懇談会を持ち、日本での研修において日本民謡に興味を持ったこと、又参加を契機として、我々の音楽等を通じて再び相互交流をしたいと努力していることが分かった。



(9) 開発省住宅整備公団の現場視察

ブルネイ政府が現在最も力を注いでいる部門の一つが、住宅整備・住宅問題である。本来、ブルネイ人は伝統的なカンボンマイル（水上部落）に親類同士固まって住んでいるが、政府は国民を陸にあげて生活することを奨励している。

我々が見学した住宅地はランバック・カナン (LAMBAK KANAN) という、首都バンドル・スリ・ベガワンから空港に向かって、車で40分程の北西の地帯にある。我々が到着するとテレビ局が取材にきており、住宅開発局も力を入れた説明をしてくれた。

モデルルームの種類は主に5つありそれは混在して建っている。入居者は所得や国への貢献度により、家の種類等政府により決められる。土地は政府が用意し、家は住人が99年間リースで、半分以上は国が補助する形であり、競争率も比較的高い。家の構造は5つの種類とも、高床式のような1階のない2階建である。これは、住人が一年間この形で住めば、政府の指導で1階部分を増築できる意図がある。家の内部構造は現代的であるが、マレーの習慣を要所に残している。学校も併設されており、住宅都市としての機能も充分はたしている。

このような、新興住宅地は現在増えつつあり、公務員用住宅や民間用住宅、さらには官民混合の住宅地もある。給料の差により家の大きさもかなり違い、低所得者に限って小さい家に親類等何世帯も同居する傾向がある。



その内の一軒で、社会福祉局に30年勤めている方の家を訪問し、意見交換をおこなった。マレーの風習に、親類同士で住む大家族主義があるが、住宅地でもそれが可能かという質問に対しては、そういったアレンジはできないそうであり、政府は核家族化も目

指しているようにも見受けられた。さらに、ナショナルスタジアムで見た地盤沈下の対策についての質問には、10m パイルを地下に埋め込む対策をしているそうである。マングローブがパイルには適しているが、大きなプロジェクトにはそれほど多くのマングローブは使えないそうである。さらに、建築の問題として、外国人労働者に頼っているので、それ程建築のスピードは早くなく、入居者を待たせているようである。

〈シンガポール国〉

(1) JICA シンガポール事務所

星所長から、シンガポールでの JICA の活動やその展望について、話を伺った。シンガポールは今世紀末には、先進国になろうとしているので、特に技術移転に力を入れているそうである。その方法としては、プロジェクト方式技術協力をとっており、その内のいくつかは現在引き渡しの状態にある。

しかし、シンガポールは経済成長はしたが、移民社会の価値観の違いからくる歪みもある。そのため、特に青年招へい事業がなくとも外国へ出る機会が多いが、小さい国であるので人物交流に力を入れており、当事業への関心は高いそうである。

また、シンガポールは、自国においてはまだ比較的に研究開発に力が注げないので、日本への援助の期待が強く、シンガポールが望むかぎり、JICA も協力していくとのことである。

最後に当チームからの要望として、JICA 事務所はさらに、当事業とアフターケアについての認識を深めて頂くことをお願いした。(現地スタッフの方々が皆新任であったため、色々な誤解が生じたため)

(2) 日本大使館

長塚一等書記官、柳井三等書記官との表敬訪問では、この事業の内容と効果、アフターケアプログラムの目的、さらに現地同窓会と日本人青年の交流活動等を述べた。シンガポール同窓会 - SAJAFI の活動をさらに活発化してもらうために、日本大使館は色々な分野で協力していくとのことであった。

(3) MR. TOH HOCK GHIM シンガポール外務省 ASEAN 局長表敬訪問

約 30 分の表敬訪問であったが、シンガポールの「21 世紀のための友情計画」の窓口である、外務省 ASEAN 局としての当事業への意気込みを感じた。外務省の一般的な招聘事業は約 2 週間という短い期間の訪問と見学だけの日本滞在であるが、当事業は一ヶ

月間に正に草の根交流を行うため、真の国際交流として大変評価が高いそうである。シンガポールはまだ、国のレベルとして、このような大々的な国際交流が行えないので、今後も当事業を存続させてもらいたいという意向を示した。

(4) 人民協会 (People's Association)

約 15 分の人民協会 (PA) の活動紹介ビデオを見た後、会議室に移り PA についての質疑応答と PA で働く帰国青年との懇談会を行った。

日本にはない人民協会という、地域と住民を対象とした活動中心の団体はシンガポールならではの組織であると改めて痛感した。政府はマレー系、インド系、アラビア系、中国系等の多民族国家を統一するため、大前提に民族を越えたシンガポリアンとしてのアイデンティティーを育成することに大変力を入れている。後に訪問する社会開発省の活動と重なる部分もあり、国の発展のためには、人民の教育と統一を目指していることがありありと分かった。

主な活動としては、社会開発と社会教育に関しての地域・住民サービスや住民参加の行事、地域の福祉活動等、日本で言えば各市町村レベルで行うことを国が一括して計画して各地域ごとに実行しているものであり、豊かな生活作りに積極的に国民を参加させている。

(5) 社会開発省 (Ministry of Community Development)

最初に住民委員会 (Residents' Committee - RC) に関するビデオを見た後、同省の機構について説明を受けた。RC は社会開発省における唯一の草の根活動であり、その役割は「国民一人ひとりが国のためにどんなことができるかということに刺激すること」にある。こうした活動の背景にはソーシャルディフェンス及びコミュニティーリレーションという考えがある。これは、第一に国民相互の調和のとれた労働と生活の体現、第二に人種・宗教を越えた国家的統一性の保持をめざす政策理念である。ソーシャルディフェンスは軍事・貿易・社会の安寧等国家レベルの分野と市民の精神・行動等市民レベルの問題とあるが、シンガポールでは市民レベルでの国家目標達成のための組織が実に木目細かくボランティア活動を利用して組織化されており、より多くの市民が具体的に「社会参加」できる体制となっている。

説明終了後、社会開発省に勤務する帰国青年を交えての意見交換を行ったが、国家的統一性を保つために具体的にどのような施策を行っているかという質問に対して、「人種の融合という問題は非常に難しく、シンガポリアンとしての意義を持たせるためのディスカッションを繰り返している」とのことであり、多民族国家における政策運営の難し

さを際立たせた。

(6) タウンカウンスル (TOWN COUNCIL)

タウンカウンスルの組織と業務について説明を受けた後、HDB (公営住宅) 及びコミュニティセンター等の施設を見学した。タウンカウンスルは政府により 1988 年 8 月に設立された。その目的は各地域毎の生活環境の向上及びその維持にあり、一選挙区内に数組織設置されている。タウンカウンスルは公営住宅の土地・建物が対象で民間の土地・建物は対象外となっている。組織は 38 人 (議長 1 名・副議長 1 名) で構成されるカウンスルを頂点にイグゼクティブコミッティーを配しており、末端に 5 つの委員会が置かれている。その業務は公共財産の維持管理・環境整備、衛生・公共財の使用管理 (許可・認可)、コミュニティ活動等多岐にわたっており、日本の地方公共団体 (市町村) に類似した業務を行っている。



タウンカウンスル設立の背景には、産業化が進んだことにより、政権等が国民の生活を細々と指揮するには限界があり、大衆レベルの自発的意見により身近な生活を高めようとする、言わば自治の精神の醸成という意図がある。将来的に地方自治体的な制度としていくのかという質問に対しては、国土が狭く必ずしも地方自治を必要とする国家

ではないということであり、地域サービスの充実が目的であって、自治権の獲得が最終目標ではないとのことであった。

説明後見学したコミュニティーセンターは各種文化施設及びデイケアセンター等完備しており、シンガポールにおける女性の社会進出を物語っていた。

3-2 帰国青年同窓会等の活動状況

3-3 セミナー・交流会実施状況

日数が比較的短かったため、交流会の場で同窓会活動状況を簡単に聞く形となった。ブルネイでは、「PERTUBUHAN ALUMNI ABAD KE 21 - ALUMNI SOCIETY 21st CENTURY」という同窓会があり、現在の会長は Awang Hj Mohd Taib bin Hj Othman (タイプ氏) であり、彼は会長兼ブルネイの窓口である、文化・青年・スポーツ省の実務担当者でもある。そのため、組織的にも大変しっかりしており、国の規模からも定期的に集まり易く、意欲的に活動している。

活動内容としては、「21世紀のための友情計画」の事前研修から始まり、日本人との再交流や日本大使館との日本文化交流等をしている。今までブルネイを訪問した栃木県民や静岡県民、アフターケアチームを積極的に受入れて、メンバーの家にホームステイさせたり、同窓会のメンバーを集めた交流会をしている。さらに、定期的に会報を作り情報交換に努めている。

また、「21世紀のための友情計画」の他に、「東南アジア青年の船」、「ASEAN 各国との青年交流」も同窓会を中心に活動を進めている。

我々は12月7日に約30人のあらゆる分野からのメンバーとのセミナーをし、意見交換を行った。彼らは大変親日派であり、一ヶ月のプログラムにも大変満足しているが、その後日本からの情報が入らないことが、不満である。「21世紀のための友情計画」がその後の様に展開したか、または日本が現在どのようなになっているのかを、日本から定期的に会報のようなもので、帰国青年全員に知らせてほしいとのことであった。さらに、自分の目でその後の日本を見るために再交流プログラムとして、4～5日程訪問できるようなものを作って欲しいとのことである。また、日本からの農業青年等の受け入れも今後やっていきたいとの事である。

シンガポールでは、SAJAFSA (Singapore, ASEAN - Japan Friendship Association for the 21st Century) が、大変活発に同窓会活動を行っている。現在の会長は MR. Christopher Chan であり、過去の勤労青年グループの参加者である。そのためか、同窓会のメンバー

は勤労青年グループの出身者が多いようである。

シンガポールでは、12月10日の人民協会や12月11日の社会開発省の訪問の際、帰国青年との意見交換の場を持った。彼らの代表的な意見として、今まで想像していた日本像と実際に滞在した後の日本像が大変違うとのことであった。日本のイメージとしては、戦争とオーチャード街で高い買い物ばかりするイメージであったが、滞在を通して日本人の暖かさや生活レベルがそれほど変わらないことを発見したとのことであった。

チャン会長始め、SAJafaのメンバーは今後も積極的に日本からの訪問を受け入れる姿勢であるが、最近特に頻繁になり受入数も増大していることから、少々疲れ気味の感も伺えた。今後も引き続き、日本からの訪問を暖かく迎えて、同窓会のできる範囲で十分なケアを行いたいとのことである。また、昨年シンガポールと日本とでユースキャンプを行い、大成功をおさめたので、引き続きこのような催しを積極的に展開していきたいそうである。

一つ残念に思ったことは、今までの帰国青年の全員が必ずしも同窓会メンバーではないことである。メンバーは勤労青年グループの出身者が多数をしめていたので、プログラムも色々な分野を見ることができたが、意見交換の場では多少食い違うこともあった感がある。IHCSAではこの「21世紀のための友情計画」が始まった当初から教員グループと公務員グループのみの受け入れであったため、その分野からの青年からのプログラム改善点等の意見が聞けなかったので、シンガポール全体の意向を浅く話合う程度になってしまった。また、同窓会も頻繁に交流のある宮崎県や勤労青年グループの受入団体の話に集中しがちであった。

3-4 ホームステイ実施状況

日程が短期間ということもあって、ブルネイでは1泊のホームステイであり、シンガポールではホームビジットであった。現地の家庭を体験するという点では、どちらも満足するものであったが、やはり家族との交流においては、時間不足であったかもしれない。ただ、忙しいなかで、我々団員を快く受け入れてくれた各帰国青年家庭に感謝したい。詳しくは、「6. 調査チーム参加者の感想」参照のこと。

〈ブルネイ〉

ホームステイ名簿

橋本 佳子 DK. ZALEHA PG. HJ SULAIMAN 1988年度 公務員参加者
No. 110 KG. MENGLAIT, JALAN GADONG, SIMPANG 44

谷田 雅洋 DK HJH HALIPAH PG HJ KAMALUDDIN 1989年度 教員・学生参加者
No. 22 W KG BATU MARANG JALAN KOTA BATU 4282

平沢 文夫 ALI RAHMAN BIN HAJI NAIM 1989年度 教員・学生参加者
No.4 SIMPANG 42, JALAN BATU BERSURAT, GADONG 3182

斎藤 文江 ANNY BINTI ARBI 1988年度 教員参加者
No. 6 B3 TAMAN PURI JALAN TUTONG 2688

内山 選良 HJ. MOHD NOOR HJ SALLEH
No. 20 SIMPANG 6 - 69 KAMPONG KILANAS, KM 12

〈シンガポール〉

ホームビジット名簿

斎藤 文江	MR. WONG YAM	1989年度 教員
橋本 佳子	BLK. 117 # 21 - 3753 BUKIT MERAH CENTRAL 0315	
内山 選良	MR. Selvaratnam S/O Arumugam	1990年度 青年指導者
谷田 雅洋	Welfare Officer	
	Residential and Aftercare Ministry of	
	Community Development	
平沢 文夫	39 Mugliston Park	

4. 訪問国における青少年団体の活動状況

短時間の滞在であったため、詳しく調査することはできなかった。ブルネイにおいては、

文化青年スポーツ省が中心となり、当事業の同窓会活動を始め、日本大使館との協力でおこなわれる日本文化・日本語の交流会や、東南アジア青年の船、ASEAN 諸国各国との青年交流活動等、積極的に行っている。シンガポールでは人民協会や開発省を中心に青少年活動を幅広く行っている。

5. 青年招聘事業に対する相手国側の評価（関係機関・帰国青年等）

いままでに記述したとおり、ブルネイ、シンガポール両国とも当事業への期待は大きい。21世紀になろうと半永久的に続けてもらいたいというのが、両国の見解である。日本での一ヶ月の滞在で、マスメディアからの視点とはまた違った日本の姿、実情を理解できることが、帰国青年の後の生活行動に係わっており、それにより自国への認識がさらに深くなるようである。さらに、参加青年同士の横のつながりができ、仕事やプライベートな点で帰国青年同窓会とはまた違う活動をしているとのことである。日本からの再交流が現在盛んになっており、同窓会組織以外の青年達でも積極的にケアをしている状況である。日本においても日本人が欧米諸国だけでなく、身近な国々に目をむけることのできるプログラムなので、相手国よりむしろ日本のためにもさらに当事業が展開することを両国との数々の懇談において確認しあった。

6. 調査チーム参加者の感想

(1) ホームステイ受け入れ家庭メンバー 谷田 雅洋

12月5日天候晴れ、午前11時50分成田空港で結団式兼出発式、橋本団長より挨拶の後調査内容及び注意事項の打合せ、チームの役割等を確認いたしました。

さて、私は「21世紀のための友情計画」でブルネイ・シンガポールアフターケア調査チームのホームステイ受け入れ家庭の一員として派遣され、10日間のアフターケア調査に参加できました。

私にとっては初めての事でもあり、出発前は大きな不安と、ホストファミリーとして受け入れをした青年との再会など、わずかな期待と複雑な心境とでいっぱいでした。

ブルネイの地に着いて

成田発午後13時30分JAL719便、20分遅れで一路シンガポールに飛ぶ。

午後9時25分定刻にシンガポール・チャンギ空港離陸、第一の訪問国ブルネイへ。

ブルネイ空港では、JICA橋本事務所長及びタイプ帰国青年同窓会事務局長が、出迎えて下さいました。とうとうブルネイの地に着いたのである。

車2台に分乗して、私たちのホテルへ。空港からホテルまでの道筋は、公園内の散歩道かのように錯覚するほど、美しい風景であった。

翌日6日午前9時、事務局長と調査期間中の日程確認打合せを行った。同窓会では、「期間が短いけれど充分ご案内したい」と話され、胸中ホッとしました。

また、期間中お世話役が常時3名着いてくださいました。

調査チームの最初の訪問施設先は、JICA ブルネイ事務所である。ここでは、ブルネイの最近情勢を橋本事務所長より説明を受けた。事前に資料等でブルネイのことを理解していたが、詳細に説明していただきましたので、今後の訪問等に大いに役立ち、国を把握することが出来ました。

ブルネイの調査日程は、一口に言って「ハードスケジュール」であった。同窓会では、帰国青年の活動や自国を見ていただきたいとのこと、又同窓会を理解して下さることを望んでいるとのことから、相互交流とは真に行動と再会を図ることに尽きると感じた。

一日の日程は、午前9時から午後5時まで、みっちり施設訪問で「気を休める」時間と「息を着く」暇がないほどであった。施設訪問先では、担当官の概要説明後、必ずその施設に勤務する帰国青年との面談を設定して下さったり、また説明担当官は帰国青年であったことに親しみを感じました。

ホームステイでの出会い

7日午前9時ホテルを出発し、ナショナルスタジアムのセミナー室で、帰国青年との意見交換を終えて、午前2時30分から私達は、それぞれのホストファミリーをロビーで待った。

事務局長の紹介で、ホストと御対面、チームメンバーの平澤氏のホームステイ先は、一昨年、地方プログラムで栃木県に来た教員学生メンバーの一人アリさん宅へ、私は、アリさんとは、栃木で一度お会いしているので懐かしかった。

ところで、私は、最初タウドさん宅へホームステイするはずであった。タウドさんは、ビジネスマンである。家族は10名で、迎えに来てくださったのは成人した息子さんでした。大変気持ちが良い、すぐ心が打ち解けあうことができた。

タウドさんの息子に連れられ、水上集落へ案内された。今日は、金曜日、男性が集会所に集合して、コーランをする。その後、三々五々食事をとるとのこと、ここでの食事は料理の量とメニューの多いのに、啞然とした。

私は、平成元年度と2年度ブルネイの青年を受け入れました。出発前、この青年に是非再会したいと願っていたところ、タウドさんは、平成元年度我が家に来たハリバーさん(女性)と親類であったために、御厚意により急きょハリバーさんの家にホームステイできることになった。勿論、橋本団長の許可、同窓会の承諾を得てのことである。私にとっ

て、劇的な再会で、感激で胸が詰まる思いでした。

ハリパーさんは、「21世紀のための友情計画」で日本に招へいを受けたときは、学生であったハリパーさんは研修期間中、日本の社会制度の理解に積極的であり、卒業後、現在外務省に就職し活躍していました。私はホストファミリーとして国のために活躍している姿を見て、嬉しかった。又家族にもいいお土産話が出来た。

彼女の家は、水上集落で、自然が織り成す景観は童話の世界にいるようであった。又朝夕の自然は美しく、不思議な国ブルネイを肌で感じた。

翌朝午前4時コーランがスピーカーを通じて流れ、目を覚ました。

一時の時間はあっという間に過ぎ、両親に見送られながら、午前8時ホテルに着いた。

ブルネイ帰国青年の活躍を垣間見て

帰国青年達の活動は、活発である。同窓会を通じて活動を図っているためであった。

同会は、帰国青年の事前研修等を行っている。又帰国青年相互の連携、日本紹介、国内での福祉ボランティア活動等及び機関誌の発行もしている。日本大使館主催の集い「日本の夕べ」に積極的に参加している。個人的には、日本で会った青年と文通を通して、友情をより一層深めていた。



同窓会は、日本からの研修訪問関係者の受け入れを積極的に行っている。最近、静岡・栃木県等の青年を受け入れたとのことでした。

ASEANの帰国青年交流を主催するなどしている。日本に招へいされた青年は、招へい青年であることの自覚と誇りを持って、地域の方々に理解を得るとともに、努力している事を知ることができた。

また、海外にでることが少ないブルネイの青年にとって「21世紀のための友情計画」は大変重要で、かつ必要であることを知った。

きれいな街シンガポール

12月9日午前11時チャンギ空港にJICAシンガポール事務所相沢派遣員、SAJafa会長、同窓会員多数が出迎えて下さった。一路ホテルへチェックイン後、団員研修ミーティング、午前6時30分から私達主催の夕食会、大使館書記官、星JICA事務所長他職員、チャン同窓会長、会員を招待して意見交換、帰国青年達は、異口同音に「陰に陽に」自分の社会生活に「21世紀のための友情計画」に参加でき、それが役立っていることを述べていた。

シンガポールでは、JICA事務所で施設等の案内のお世話を受けた。

10日午前10時JICA事務所を訪問、星所長よりシンガポールへの協力と役割、現在の状況説明を受けた。説明の中で日本との協力援助で、特に目を見張る事項としては、構造物（セメントによる腐食）の研究協力、21世紀への雇用不足化のためにロボットによる生産性の向上協力である。

シンガポールは、国際貿易都市としてアジア文化の集合体的であると感じ、街並みはきれいであった。JICA事務所、日本大使館、シンガポール外務省ASEAN局長表敬訪問、タウン・カウンスル（住宅団地内コミュニティセンター）施設訪問、人民協会では帰国青年との懇談会、社会開発省訪問をし、事業概要の説明を受け、そして社会開発省に勤める帰国青年との懇談会を行い、今後「21世紀のための友情計画」のプログラム作成に生かすために、日本での体験を通してどう考えるかをテーマに、私達と意見交換をしました。その中で、私達の質問に対して、青年達の積極的な姿勢に感銘を受けました。

シンガポールでのホームビジットを経験して

私が体験した家庭は、本年度、青年指導者グループの参加メンバー青年宅でした。

シンガポールは、国土が狭いために殆ど人口の86%は、タウン・カウンスル高層住宅に居住していますが、私がホームビジットした方はインド人で、一軒家の家庭を体験できました。ここでも、大歓迎を受け、妹さんが歓迎のインドダンスを披露してくださいまし

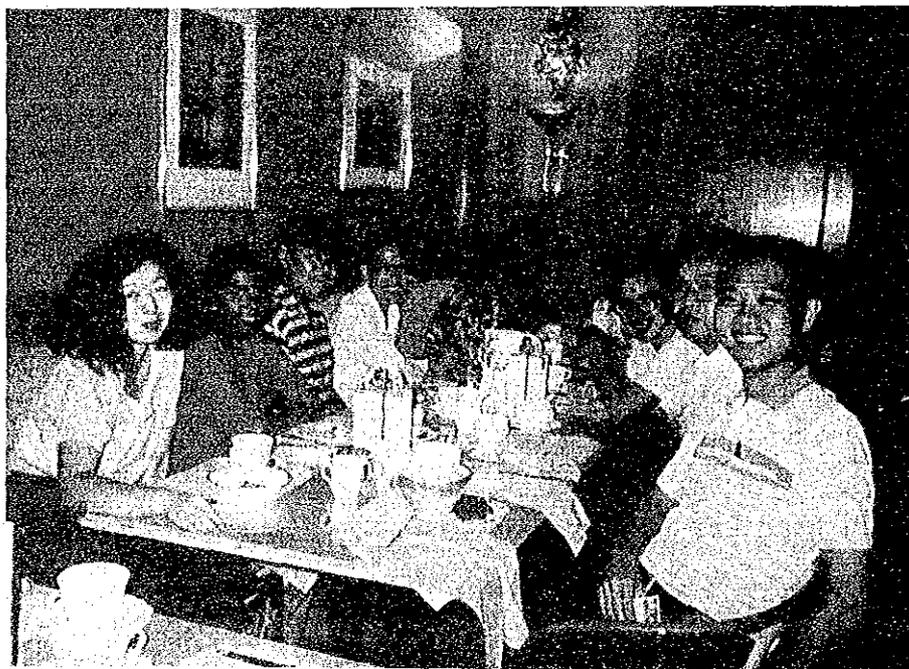
た。珍しいインドダンスを拝見できて、大変嬉しかった。

シンガポール帰国青年の活躍

帰国青年の活動は、チャン会長を中心に、日本からの地方友好訪問関係者を積極的に受け入れている。最近、宮崎市とは、相互交流などを実施しているという。

特に帰国青年達の中で、青年指導者グループメンバーが同窓会に多く加入し活躍していることが分かった。又、帰国青年達は地域のボランティアやコミュニティ活動に必ず関わり社会参加活動を展開している。

意見交換で、帰国青年達は、友情計画プログラムの中で、地方プログラムが好評であること、又ホームステイでのホストファミリーの親切さを、忘れることができないとのこと、一方、日本人はシンガポールに来て、私達では考えられない高い物品を買うとの意見もありました。



おわりに

ブルネイ・シンガポール滞在期間中、現地 JICA 事務所にお世話になったこと、又ブルネイでは、常に3名の帰国青年が世話役として私達に帯同下さいました為、一層現地を理解し相互交流に役に立ちました。

それぞれの空港では、多くの青年、ホストファミリー等関係者の方々に歓送をうけ、別

れに際して目頭が熱くなりました。

今回、ホームステイ受け入れ家庭としての参加で、この「21世紀のための友情計画」が、国内外の多くの方々が、関係し実施されている事を知りました。

真に友情とは、相互交流により信頼が深まると感じさせられました。最後に今回の参加に際し、お世話になった関係者各位に感謝申し上げます。

(2) 合宿参加日本人青年代表 斎藤文江

ブルネイ

トランジットでチャンギ空港におりた私は、ここで初めて日本の外を意識した。以前より、この空港の施設の充実度は聞かされていたものの、新東京国際空港のバンク状態の後の、その国際空港として国政展望にたった機能、空間利用、それにもまして驚いたのが、人間の移動形態である。一瞬おっとりとしているような歩行移動であるが、決してそうではない。空港という誰もが目的移動の場であるが、確かに、おっとりさの中に目的のある方向性を呈しながら確実に流れているのだ。人々の歩行さえも空港の構造機能と重なって、このASEANのシンガポールに、日本人にない余裕すら感じさせられた。

人影まばらとなった深夜のバンダル・スリ・ベガワン空港にはJICAの橋本所長と同窓会事務局長タイプ氏が暖かい笑顔で我々を出迎えて下さった。翌朝のブリーフィングでタイプ氏に紹介された3人の元招聘青年が、タイプ氏と共に滞在中我々と行動して頂くこととなった。橋本団長と私は、その内の年齢も近い女性2人と打ち解けるには、時間はかからなかった。行程を通し、素朴な疑問、率直な見解のやりとり、何ととっても妙齡の若い女性、内容は多岐にわたり、まさに21世紀のための友情計画である。といっても彼らは公務員としての肩書も持ち、ブルネイ人としても愛国精神の持ち主である。

JICA事務所では、私達に橋本所長から、このプログラムに臨むにあたり、事前情報もいえるべき、非常に分かりやすい説明をうけた。また、歴史センターにおいては、ブルネイの歴史と回教の関わりについて、サルタンの系図によって、西洋的解釈とは別の観点からのブルネイ独自の解釈の熱心な説明を館員から受けた。これはただユニークという驚きばかりではない。ユニークさの対極には、西洋発想的学問論拠に基づいた学校教育を受け、その思考回路をもつ人間としての我々の存在を認めざるをえなかった。

彼らにはある種の強さがある。それを担う一つが宗教である。生きてゆく上で、価値観の根底を成すイスラム教。生まれた時から、ある者は国教として学校教育で、家庭において、社会の機構においてのイスラム教……真理がそこにある。

かつて、私はイスラム教徒である青年数名の、「この国の経済力を担う、天然ガス・石

油が、“あと50年で枯渇する”との発言に、“まだ50年”の発想であった。(イスラム教徒以外にも問うべきであった！)

この発想がどこから来るのか。単なる楽観的国民性なのか。この疑問の一部が今回解けたように思う。彼らにはコーランがあり、14世紀からの国王の存在。それらの存在が我々の憶測を越えるある種の強さ、“まだ”的発想につながっているのではないか。我々は「まだまだお互いのことを知らなすぎることが何をもたらすのか」に、気づき始めている。そして、交流という名もとの相互理解を深めてゆくことが、21世紀にむけての我々の方向性を決める一つであると深く感じた。

また、これらの視察プログラムに対し、別な視点からの友情計画プログラム検討に欠かせないのが、ホームステイである。各家庭での誠意のこもった歓迎は勿論、その内容は別として、私個人感心させられたのが、団員5人のバラエティにとんだ、割り振られ先である。担当者の配慮が伺われた。

私の滞在先、Ms. Anny Arbiは大学講師、教員学生プログラムの参加者(私自身IHCSA担当のブルネイ教員・学生グループの合宿参加者であり、また、教員でもあるという点から、この配慮はプログラムの主旨を満足させるものであった。)、主婦であり二人の幼児の母(この日2人は実家に預けられていた)、夫は中国系でシェルのエンジニア、2人とも英国留学が長く、回教徒でなく、大学の教員住宅に4人で住んでいる。ブルネイ国は英連邦としての影響が強く、大学教育終了後は英国留学に赴く者が多いとのこと。子供はしっかり実家に預けてある点は、カンボンアイルの大家族を訪れた後の私にとって、また違った設定でもあった。

夕食は外食、マレー料理のおいしさもさることながら、彼ら(友人も加えて)には中国料理の味覚は何ものにも代え難いようである。レストランには親類であろうと思われる中国系のグループが多数を占め、季節がらかクリスマスソング、飾り付けがなごやかな雰囲気を出していた。

ディナーの後は夜景の美しい丘、モスク、宮殿を眺めつつのドライブ。ブルネイには公共交通手段が発達しておらず、マイカーである。すれ違う車は外車(日本車も多く、ドイツ車、イタリア車、イギリス車等、我が国でも人気のある外国車、若干の韓国車)、湾岸危機後も国内ではガソリン代への表面的影響はないようである。ガソリン代は日本より3割ほど安く、税金も低く、新車が圧倒的に多く、各家庭が複数所有している。しかし街は静かである。夜のドライブを楽しむのは我々の発想であり、回教徒が大多数のお国柄、若者のカップル姿はこの美しい夜景の中に見られない。

翌朝、ホテルに戻る車中、彼女なりの友情計画プログラム、同窓会メンバーとしての率直な意見を伺いながら意見交換をした。また教師という職業柄、それをどう学生達に還元

しているか、欧米型価値観の教育を色濃くうけた彼女の目で見たとブルネイの教育のあり方、価値観の相違、また、「合宿セミナー日本人参加者としての観点とともに、お互い教育者として、常にかかえる問題点」「次世代を担う個性豊かな人格形成にどうアプローチしてゆくか」等、大いに切りこんだ。また、この話題についてはシンガポールにて教員グループの友人と再会した際にも、大いに盛り上がった。

「ブルネイは暑い国である」が、実際は緑のせい、この時期湿度は思ったよりは低い。気候の違い、風土の違いは人格形成に様々な影響をもたらす。音楽も、言葉のごとく民族の共通理解、仲間意識を担う働きを色濃く持っている。私個人の第一印象では、内的な自己が内奥の自己を表出するものとしての西洋音楽に比べると、ある種の具体性をもった言葉の意味さえ感じられる。明治以降の邦楽を切り捨て、洋楽にのっとった我が国の音楽教育。そして巧みにその洋楽に日本語の音揚をのせてしまった、なんとも器用さを持った日本の音楽教育に関わる私にとっては、ブルネイの伝統芸能とその演奏者、芸能者に触れたのは、誠に良い機会であった。彼らの表現した、彼らの大切にしているという、「MODERNとTRADITIONALの双方」とは、彼らが私達に伝えたかったその意味は……。まだまだ交流は始まったばかりなのである。

シンガポール

合宿セミナーに参加して以来、シンガポール教員、公務員グループのメンバーから、またこのアフターケアプログラムで、何度「相互理解」という言葉を聞いたことか。多民族国家であるということを単なる知識として、とらえていたところから、今回彼らの国を訪問することができた。

宗教・習慣・MOTHER TONGUE等の面の多種多様さは様々な価値観の共存である。国民相互の融和を高めることにシンガポール政府の国家事業の取り組みが多く見られる。民族間の融和、発展がシンガポール国家発展における重要な課題となっている。お互いを尊重しつつ、それぞれがよき一国民であろうとしてゆく努力、その調整を進め底上げを計るものに、今回の訪問先のHDB、CC、PAがある。PAは実施段階のリーダー養成、プログラムの充実、そしてHDBフラットにおけるCCは地域集会所というよりは、より積極性をもったクリアな目的意識をもとにした企画運営、実施の場である。これだけのスペースをさくよりは、その分何戸分の住宅スペースか、と計算してしまうところが、同じ住宅問題を抱えていても、これが日本人なのか。一方では、あまりにも整頓された託児・保育施設になじめないものを感じた私ではあるが。

このプログラムの一参加者として設定された訪問機関、その構成はバランスがとれていたと思う。先方青年諸団体、そして帰国青年との再交流を通し、日本人合宿青年の一人として彼らの暖かい気持ちが身に染み、また、友情計画に参加する者としての新たな意欲、

反省、課題等をより鮮明にもつことができ、今後の大きな課題ができた。個人的にわずかな時間を私達の為にさき、沢山の場を設定してくれた友人達、そんな懐かしい彼らとの、より率直な意見の交換、本音を出し合える仲。今回私は、合宿セミナー日本人青年の一人としてプライベートな立場で参加した。私は、私の職場―教育現場―における、「交流」という表現によつてもたらされる行為、人々の観念に疑問を持っていた。「交流」―系統の異なるものの交わり、健常者に対して、障害者としてひとくくりにされている私の教え子達。交流とは時には差別意識、偏見を助長させる。国際交流も、彼らへの理解も同じである。同じ地球という「船」に乗り合わせた者同志である。教育の現場でも同じである。彼らから学ぶ、痛感させられる。次世代を担う人材を育成する教師としての誇りを持ちながら、その視点で、この21世紀のための友情計画に参加する―地球人としての責任を痛感するものである。

ブルネイ、シンガポール、そして日本のJICA、ブルネイ、シンガポールの同窓会の方々、関係諸機関、各アレンジをして下さった友人、快く送り出して下さった学校関係者の皆様に厚く感謝申し上げます。

(3) 栃木県受け入れ団体代表 平 沢 文 夫

深い緑の葉のあざやかな街路樹、広く良く整備された道路、温かく肌に絡みつくような南国の空気、夜の静寂を覚ますかのようなスコール……空港からホテルまでの短いドライブの車窓からは、静かな南の国の自然がパノラマのように展開される。そんな光景を目にし、見知らぬブルネイ・ダルサラーム国へ来たのだということを、私は実感した。

私達アフターケア調査チームの一行がブルネイの首都バンドル・スリ・ブガワンに到着したのは12月5日の深夜であった。深夜にもかかわらず、空港にはJICAの橋本ブルネイ事務所長と同窓会事務局長のタイプ氏が出迎えてくれた。13時30分発のJAL719便で成田を発つてからの長旅で多少の疲労を感じていた私は、深夜だったこともあり、チェックインも早々に眠りについたのだった。

翌朝から、調査チームの日程は実質的に始まったのだが、今回は10日間に2ヶ国を訪問する計画のため、ブルネイの日程は実質3日間しか取れない関係もあり、ブルネイでのスケジュールはかなり密度の濃いものだったと思う。JICAの事務所訪問、日本大使館表敬、福祉青年スポーツ局長との昼食会、歴史センター訪問と一日目はアツという間に終わってしまった。二日目は、午前中にブルネイの帰国青年との意見交歓会を行い、午後からはホームステイに入り翌朝8時にホテルに戻った。三日目は午前中経済企画局で「ブルネイ社会、文化、経済について」の講義を受け、その後ハンディクラフトセンター・民族芸能

センターを見学し、開発省の住宅開発計画の現場を訪れ、ブルネイの住宅政策の説明を受けた。このような訳で、ブルネイでの滞在は降く間に過ぎてしまった感がする。

今回の調査チームに参加する前は、私にとって、ブルネイという国は遙か遠い国であった。栃木県は、21世紀のための友情計画に基づき昨年、今年とブルネイ青年を受け入れているので、僅か10日余りの滞在期間にブルネイ青年との交流の経過はあるものの、ブルネイの国に関する資料は極めて乏しく、「石油・天然ガスの地下資源が豊富な、豊かで敬けんな回教の国」程度の知識しか持っていなかったのである。そんな赤道直下の希薄な存在感の国が、僅か5日間の滞在で意識の中に確実に刻み込まれ、国の全体象が鮮明に描かれるに至った。同時に、豊かな天然資源に支えられ、豊かさと近代的な様相を呈する「光」の部分とその裏側に潜む「影」の部分が次第に明らかになってきたように感じる。

果たして、南国の強い陽光に照らされるブルネイの街並みは見事に整備され、往来する車は良く整備された日本車であり、10年以上も使用されて傷みのひどいものはほとんどない。車窓から見る家並みも洒落たコテージ風の家で、開発途上国で良く目にする老朽化したバラック風の建物を目にするのはほとんどない。こうした光景は、この国の豊かさをなによりも物語っているように感じられた。事実、この国では所得税は無く、医療費も無料である。また、日の出とともに始まるこの国の一日は、現代の都市に共通の喧騒は全くなく、静かに穏やかに時は流れ、日暮れていくのである。強い日差しに汗ばむ顔をハンカチでふきながら佇む私は、幾度となく、こうした光景を奇妙な違和感として不思議に感じるのだった。

およそ今日の先進工業国は、例外なく社会が工業化の洗礼を受けており、同時に社会機構の複雑化を余儀なくされ、細分化された時間の中で暮らしている。そんな中の一人である私には、この国の示す姿が容易に理解できなかったのに違いない。ブルネイに出現した現代的な都市機能は、社会の工業化の結果ではなく豊かな天然資源の恩恵の結果である。人々は未だ工業化の洗礼を受けておらず、このことが人々の表情の素朴さ、生活のリズムの裕り、ストイックな信仰心の維持の秘密であり、ブルネイ特有の表情を映し出す。

しかし、また、このことがブルネイという国の決定的な弱点でもあるのではないか。この国には、国家建設のための基盤産業がほとんど育っていないかのようである。あらゆる社会建設のための事業が国の施策という形でのみ進められ、民業部分はほとんど零細な日常生活に関する分野にしか存在しない。このことは、労働者の45%が公務員であり、その収入は民間人の収入を凌駕し、また労働者の1/3を外国人に頼らざるを得ない状況に見ることができる。社会建設のための技術者のリーダーの多くは外国人であろう。豊富な天然資源から得られる収入の多くを海外投資に向けて、将来の国の財政の安定を保障しようとする政策も、裏を返せば世界の経済の景況に左右されやすい、極めて貧弱な体質に思

える。ブルネイでの様々な機関の訪問は、私に、この国の子細な姿を明らかにせしめることとなった。

帰国青年との交流は、調査期間中大きな成果を上げたと思われる。特に、滞在期間中ずっと同窓会事務局長のタイブ氏を始めとして4人の帰国青年の方に同行いただき、様々と世話をいただいたのには、心から感謝の気持ちを表したい。また、公式・非公式の連日のパーティーで多くの帰国青年とフランクに話し合えたことを通じて、ブルネイの人々の穏やかな人柄及び日本に対する親愛の情を強く感じさせられた。とりわけ、「帰国青年との意見交換」では、「21世紀のための友情計画」事業に対する強い期待と一層の交流の推進を望む気持ちを感じこれまでの事業推進の成果を強く感じさせられた。

1泊2日で体験したホームステイも、私にとって貴重な体験となり多くの思い出を残すこととなった。アリさんの家庭は奥さんと子供2人の4人家族で、市中心部から少し離れた郊外に洒落た現代的な家を構えている。周りには親戚の人が住み、一族を形成しているかのようである。ブルネイでは親類の結び付きが強く、親族が固まって住むのが一般的のようである。ホテルに迎えにきたアリさんは、早速友人の家で子供の誕生祝いの宴があるとのことで、私を案内してくれた。ジリジリと照らす南国の太陽は日本の真夏を思わせる。庭先には数棟のテントを張り友人や近在の人が三々五々集まってくる、家の中ではお祝いのセレモニーが行われ、その間人々は談笑しながらセレモニーを終わるのを待つ。セレモニーが終わると赤ん坊を皆に披露し、人々から祝福を受ける。各テントには主家の用意した御馳走が置かれ、皆で会食して散会となる。何とも素朴で人の臭いのする儀式である。地方に住む私の地では、子供のころ、こうした祝い事が同じように行われていた。子供達は「お呼ばれ」と言って楽しみにしていたものだ。現代の日本ではこうした祝い事も様変わりしてかつての面影はない。日本人が捨ててしまったかつての共同体的生活習慣が、ここでは自然に営まれている。祝儀に参加しながら、不思議な懐かしさを覚えるのだった。

ともあれ、短い日程の間に多くの体験をしてシンガポールへ移動することになった。南国の豊かな国ブルネイも種々の技術分野では多くの課題を抱えている。豊かな天然資源も永遠のものではないとすれば、日本もこの国に対して協力できる多くのことがある……そんな思いを強く感じてブルネイの地をあとにすることとなった。

シンガポールでの日程は、ブルネイの日程が極めてハードだったこともあり、かなりゆったりとしたもののように感じた。しかし、この地でも様々な機関を訪問し、シンガポール特有の表情を知ることとなったのである。シンガポールは歴史上重要な貿易拠点として栄えてきた。長い植民地支配の時代を経て独立後、近年、産業の発展も著しく、最近ではASEAN諸国の旗頭的な地位を占めるに至っている。また、中国系・マレー系・インド系

等様々な民族により構成する多民族国家としても知られている。

調査期間中の体験もこうしたことを実感させられるものであった。訪問先で会った人達は皆自信に満ちているように感じられた。また、街を歩いていても実に多くの人種の人に出会うので驚かされる。ここでは、肌の色や言葉の異なる人がいることは当たり前であり、誰一人として問題にしない。正に国際都市である。「国際化」という点では、日本をはるかに上回るのではないだろうか。

多民族国家であるシンガポールでも中国系の人が70%を占める。そのせいか訪問した機関で会った人も大半が中国系の人であった。SAJAPAの会員も多くを中国系の人々が占めていた。シンガポールの重要な地位の多くは中国系の人々がしめていることが推察できる。このため少数派であるマレー系・インド系の国民との融合に国が大変腐心しているようである。社会開発省を訪問した際も「シンガポリアンとしてのアイデンティティーを国民に持たせるために多くの施策を展開している」という担当官の言葉には、多民族国家の難しさが充分窺われた。また、「ボランティア精神」の浸透という面でもシンガポール特有の表情を見せる。しかもシンガポールでは社会の隅々まで浸透した「ボランティア精神」を活用して国の施策が見事に展開されている。政権党の他に有力な対抗勢力のないシンガポールならではの現象と感じられた。

帰国青年との交流に際しても、彼らは皆自信と活力に満ちていることを感じさせられた。また、多くの女性が職業を持ち社会に参加しているようであり、概して合理的精神に基づき行動する。国際貿易都市としての長い歴史の間に多くの欧米先進国との交流により培われたものに違いない。

こうして、10日間の調査日程は無事終了し、12月14日の早朝ホテルをチェックアウトし、チャンギ空港に向かった。空港には多くの帰国青年が見送りに来てくれた。調査日程を無事終えた安堵感でメンバーの顔も皆ほころんでいる。私達は皆青年との別れを惜しみつつ日本に向け飛び立ったのである。

今回、アフターケア調査チームに参加して多くの貴重な体験をすることができた。とりわけ、私のように地方の協力団体の一員として「21世紀のための友情計画」の中の一部にのみかかわっている者にとっては、調査チームのメンバーとの話し合いや現地の関係者との接触によりこの事業の全体像を理解することができ、また帰国青年との交流を通じて事業に対する彼らの期待感と過去の確実な成果をつぶさに知ったのである。何よりも10日の間の実に多くの人との出会い、ふれあい——このことが私にとっての一番の遺産であった。ASEAN諸国のそれぞれの国に帰国青年の同窓会組織があり活発に活動している。今後も彼等の活動が一層発展し、日本がより理解され、好ましいパートナーシップが形成されていくことを願っている。

7. 提言

ブルネイとシンガポールを10日間で回ること、日程的に慌ただしい訪問であったが、その国その国のカラーが出るスケジュールであり、大変有意義なものであった。特に、ブルネイは受入窓口担当者が同窓会の会長であり、JICAブルネイ事務所との協力体制がよいため、大変完成度の高いスケジュールであった。訪問先もよく考えられた所をえらんであり、ブルネイの経済・社会・生活文化・政治等の全てをカバーしたものであった。また帰国青年とのセミナーや意見交換の場にも、あらゆる分野からの帰国青年を集めてくれ、有意義な討論会となった。昨年度のブルネイアフターケアの報告書に見られた、ブルネイでの当プログラムの認識不足は今回は改善されたのか、全く感じられなかった。

ブルネイは国が小さいことから、日本への期待が大変強く、特に青少年育成における当プログラムへの意気込みはシンガポールより強いようであった。先にも書いたが、日本からの「21世紀のための友情計画」と日本の状況に関する定期刊行物を強く要望しているので、今後JICAで作成し、帰国青年に配布してつながりをさらに強くする方向に持っていけることを期待する。さらに、再交流制度が来年からできることは、現地の評価が高かったため今後の発展が双方で望める。

シンガポールでも日本との再交流制度を大変評価しており、昨年度行ったユースキャンプの様には日本からの大々的な再交流も発展的に考えている。同窓会の組織自体しっかりしているので、全く問題はない。ただし、昨年度の静岡県沼津市のシンガポール訪問のように、必ずしも同窓会に過去の自分たちがケアした青年がいるわけではなく、訪問側の意図と大きく食い違ってしまう可能性が高い。その点をもっと日本側にも知らせるべきである。

また、JICA事務所の人事異動のため、職員の方々が「21世紀のための友情計画」について慣れていなかったせいもあり、アフターケア期間中JICA事務所側と当チームで少々行き違いを感じた。今後、このような事が無いように本部と現地事務所とで連絡体制の強化引き継ぎ等をやっていただきたい。

最後に、我々の滞在中または準備段階等でお世話になったあらゆる方々にお礼を述べたい。またこのようなアフターケアをさらに拡大して、一般参加者にも経験できるようにできないものだろうか。今回、チームの中に、合宿セミナーの日本青年やホストファミリーが参加してくれたのは、今後のプログラム発展に大きく貢献していくものと信じている。さらに、このような方々の参加の負担を軽くする意味で、宿泊料もJICAに負担して頂くことを期待する。

マ レ イ シ ア

平成2年12月12日～12月21日

社団法人 全国農村青少年教育振興会

1. 調査チーム派遣概要

1-1 調査チームの構成

上段：現住所／下段：所属

松村美代子 24 女 熊本県下益城郡松橋町御船 652

農業（熊本県青年農業者連絡協議会副会長）

* 1990 年度マレーシア農村青年（テーマ B）の地方協力団体役員，ホストファミリー

中村 貴子 30 女 東京都杉並区梅里 2-7-20 ポニーハイツ 207

国際協力事業団研修事業部青年招へい業務室

（財団法人国際協力サービスセンター）

東京都新宿区西新宿 2-1-1

* 青年招へい事業担当者

野口 栄一 31 男 群馬県勢多郡富士見村石井 1810-1

農業（群馬県青年農業者）

* 招へい事業初年度（1984 年）マレーシア農村青年ホストファミリー

鈴木 達也 34 男 東京都目黒区目黒 1-11-3

財団法人日本武道館振興部振興課主任

東京都千代田区北の丸公園 2-3

* 共通プログラム関係者

駒井 俊幸 45 男 東京都世田谷区瀬田 1-7-9

社団法人全国農村青少年教育振興会業務部長

東京都新宿区新小川町 4-1-19

* 実施協力団体実務担当者

1-2 調査日程

① 調査日程 平成 2 年 12 月 12 日（水）～12 月 21 日（金）までの 9 泊 10 日間

② 日程の詳細

出発前打合せ会 12 月 11 日（火）（振興会会議室）

オリエンテーション 17：00

- ・ 日程説明及び調査事項についての検討
- ・ 報告書作成に伴う役割分担の検討
- ・ 壮行会

12 月 12 日（水）

8：00 新東京国際空港集合

- 10 : 00 成田空港出発 マレーシア航空71便 (台北経由)
- 13 : 10 台北空港着 1時間のトランジット
- 14 : 10 台北空港発
- 18 : 20 スパン国際空港到着
- PAMAJA (青年招へい事業参加者の同窓会) 事務局長 Sahariman 氏をはじめ多数の関係者の出迎えを受けた。
- ・入国審査のカウンターの直ぐ隣に約10ヶ国の外貨を両替する「両替機」が設置してあった。
 - ・空港待合室の前でPAMAJAメンバーが出迎えていて、スムーズに手続きを済ませることができた。
- 20 : 30 ホテル到着 (ホリデイ イン オン ザ パーク)
- 21 : 00 ・「日程等打ち合わせ」(ネクタイ着用)
- 人事院 WAHAB 氏、PAMAJA 会長 JAMIL 氏、同 事務局長 SAHARIMAN 氏及び JICA マレーシア事務所西本次長を交え約1時間の打ち合わせ。質疑は全て英語。その後夕食。
- 23 : 30 ・1990年テーマB参加者を主体に夕食歓談の後、メンバーでこれからの方針等について簡単に打合せの後解散。

12月13日(木)

- 8 : 30 ホテルロビー集合 (ネクタイ着用)
- 9 : 15 ○JICA マレーシア事務所表敬訪問
- 西本次長よりマレーシアにおける技術協力の概況説明を受ける。調査チームの日程はPAMAJAが全面的に自主性をもって作成したとの報告を受ける。
- 10 : 20 ○人事院表敬訪問 (PSD)
- 青年招へい事業のマレーシア側担当者である WAHAB 氏より、派遣の目的や派遣候補者の選考過程及びPAMAJAについての説明を受ける。
- 11 : 40 ○青少年スポーツ省表敬訪問
- SUROYA 氏より青少年スポーツ省の機構及び活動内容についての説明を受ける。
- 13 : 40 ・昼食 (プトラ・ワールド・トレード・センター)
- ・PSD, PAMAJA メンバーと昼食。ちょうど農業大臣も昼食に来ていたので、挨拶をし、記念撮影。
- 14 : 50 ○連邦農業市場公団表敬訪問

公団の活動をともしマレイシア農業の説明を英語の音声付きスライドにより受け、農業及び公団の活動を紹介するパネル展示室を見学。フルーツと焼き鳥の簡単なスナックで休憩。会議室に移りビデオでフルーツ中心の農業事情についての説明を受ける。

18 : 00 ・ホテルに戻り休憩。

20 : 30 ○市内散策

・PAMAJA メンバーの案内でベタリンマーケットへ、引き続きチャイナタウンへまわる。

22 : 00 ・チャイナタウンの屋台で遅い夕食。

23 : 50 ・カラオケへ行きたいという PAMAJA メンバーの希望があったが、団員皆グツタリ、丁寧に断りホテルに帰る。簡単なミーティングの後解散。各自、明日からのホームステイに備え健康に充分留意するよう気を引き締める。

12月14日(金)

8 : 30 ・ロビー集合(服装自由)

・今日からホームステイに入るため、ホテルをチェックアウトする。
・各自荷物を全部持って移動する。

9 : 30 ○マレイシア森林研究所視察 (JICA 協力プロジェクト)

JAFFAR 氏から熱帯雨林の保護、調査、木材加工等についてスライドにより説明を受ける。石原博士 (JICA 専門家) の案内で資料館を見学する。昔の家具や道具が展示されていた。巨大な「板根」が見学者を引き付ける。その後、石原先生の案内で、「ヒル」に気を付けながらの植林された実験林のジャングルトレッキングは、貴重な体験であった。

12 : 15 ・昼食地及びホストファミリーとの顔合わせ場所であるゲンティンハイランドへ向けて出発。

13 : 10 ・山の中腹のケーブルカーのスリラヤン駅到着。

・PAMAJA メンバーのうち数人が近くのモスクへ祈りにいった。

13 : 10 ・山頂へケーブルカーで向かう。約 10 分。

・ホテル1階のレストランでホストとの対面そして遅めのピッフェスタイルの昼食。

・ゲンティンハイランドは標高 2,000m にホテルをはじめ各種スポーツ施設、遊園地、人造湖、マレイシア唯一のカジノまである。涼しい、先程までの湿気と熱さがまるで嘘のようである。霧雨、表は寒いくらい。

- 15 : 50 ・ホスト別に3台の車に分乗してテメロへ向かう。
- 16 : 30 ・フタン・リーブル着。
 ・川辺でピクニック、雨季のために川の水は茶色。ケーキやヤシジュースのもてなし。全員が揃って話を始めたらとたんに“どしゃ降り”，早々に引き上げ、テメロへ向かう。
- 17 : 20 ○テメロ郊外の集会所で「歓迎会」
 ・PSD、WAHAB氏をはじめPAMAJAメンバー多数の出席を得てお茶とお菓子によるもてなしを受ける。
 ・改めて団員一人一人がホストとともに全員に紹介される。
 ・古武術「シラット」が披露された。
- 18 : 10 ・全員で記念撮影の後、各々ホームステイ家庭へ向かい、ホームステイプログラムにはいる。
 [ホームステイは別に報告。以下は共通する日程について報告]。

12月15日(土) (服装自由)

- 7 : 00 ・鈴木団員はホームステイ先を7時出発、駒井団長、松村団員、野口団員、中村団員と順次ピックアップされる。
- 9 : 30 ○ツン・ラザック農業試験場訪問
 ・所長より展示してある資料をもとに試験場の活動についての説明を受ける。その後土壌分析や肥料、養分測定等の試験を行っている建物を見学する。お茶とお菓子の接待を受け、記念撮影をし、訪問終了。
 ・各ホストがこれからの共通プログラム全てに同行した。勤めはどうなっているのか人ごとながら心配になる。
- 11 : 40 ○油ヤシ工場見学
 ・車から見わたせる山は全てヤシのプランテーション、改植したばかりのヤシもかなり見られた。
 ・正面入り口脇のミーティングルームでYUSOFU氏よりヤシの実から油ができるまでの説明をフローチャートにより受ける。
 ・生産物は圧縮した際に生じる「肥料(30%)」と「油脂(70%)」に分けられ、油脂はさらに食用油と工業用油に分けられる。もちろん工場運営の電力と動力も賄っている。
 ・全員ヘルメットをかぶって工場見学。労働者は2交替制で男性のみ100人。かなりの重労働と想像できる。しかし、今日は休日のため稼働していなかった。

13 : 00 ○ゴム工場見学

- ・途中道路の両側は全てゴムのプランテーションが延々と続いた。
- ・工場の責任者より工場の概略の説明を受ける。採取したゴムの原材料を乾燥させ、40 cm四方の立方体に固める。乾燥させる段階で、種類によって色が白から茶色、薄茶さらに黒に変色する。黒い物ほど品質が下がる。
- ・生産されたゴムの主な輸出先は日本である。タイヤ等多くのものに加工されている。しかし、ビニールやプラスチックの進出により輸出はあまり伸びていない。
- ・工場の生産力は1時間8tである。工場周辺を車で見学、鼻をつく悪臭でとても下りて中に入る気がしないほどであった。

13 : 40 ・フタン・リプール近くのドライブ・イン（屋台街）で昼食。

16 : 00 ・雨季の強烈な雨のなかをバハン州の州都クワンタン着。

- ・PAMAJA クワンタン支部のメンバーの車に乗り換えチェラティンビーチ・リゾートへ向かう。訪問先では現地の PAMAJA のメンバーがプログラムをコーディネートしている。

16 : 40 ・チェラティンビーチ・リゾート着

- ・広く長い海岸線、近くには「地中海クラブ休暇村」があり、観光地として売り出し中。
- ・雨季のため泳ぐには適さない、人影も疎ら、波も高く、風も強い。

17 : 00 ○海辺のレストランで「歓迎会」

- ・潮風を受けての食事はこのうえもなく快適であった。

18 : 00 ・クワンタン PAMAJA メンバーと別れを告げ、テメロに向かう。

18 : 30 ○「技徳会」剛柔流空手道場訪問

- ・帰路、道路に面した「空手道場」に飛び込みで訪問。SHAHARIMAN 氏が事情を説明したところ、快く受けてくれた。3人の子供が演武を披露してくれた。
- ・突然の訪問に対して深く謝意を延べ、記念品を交換し、全員で記念撮影。再びテメロに向かう。子供たちの顔が“まぶしかった”。

20 : 00 ・途中のモスクに寄り、PAMAJA メンバーの半分がお祈りに行く。半分は我々と同行し、近くの商店街を散策する。

21 : 30 ・松村団員のホームステイ先で一休み。朝とは逆の順で帰る。

- ・日本では考えられない広い居間に全員車座になりお茶とお菓子で懇談

する。

- ・ホストのお父さんはゴーストのためよく写らない白黒のテレビでサッカーのマレーシアチームを熱心に応援していたのが大変印象的だった。
- 23 : 00 ・各ホームステイ先をまわり、キーステーションとなっている SHAHARIMAN 氏宅（駒井団長ホームステイ先）着。ようやく長い一日が終った。

12月16日（日）

- ・昨夜来の強い雨が降り続く、それぞれのホームステイ先で一日を過ごす。
- 20 : 00 ○「さよならパーティー」（PAMAJA 事務局長 SHAHARIMAN 氏宅）
- ・ PSD. WAHAB 氏がわざわざクアラルンプールから来てくれた。土地の有力者から PAMAJA メンバーまで男女あわせて 60 数名が集まった。
 - ・ SHAHARIMAN 氏の同僚の教師と夫人の同僚の教師が料理の手伝いのため午後中動員された。
 - ・ 特別の挨拶もなく、食事が始まり、約 1 時間で終る。PAMAJA メンバーの女性は我々と同席して食事をしたが、他の女性は我々と全く顔を合わせることなく別室で食事をとっていた。
 - ・ 男性団員は、それぞれホストから民族衣装（シャツ）を、女性団員もマレー風の裾の長い衣装と「浴衣」着用で出席した。
 - ・ 車にて「地域の青少年クラブハウス」へ移動。
- 21 : 30 ○民族舞踊と古武道の鑑賞
- ・ サッカー・グラウンドやゲストハウスを備えたクラブハウスの広いベランダが会場。雨が降っているので、電灯をめざしておびたしい数の虫が集まってくる中、メンバー一同、蚊に刺されながらの鑑賞となった。
 - ・ さよならパーティー参加者がほぼ全員参加し、加えて、一般の人達も集まり、総勢 80 数名。
 - ・ 土地の有力者が入れ代わり 5 人がマレー語で挨拶。さっぱり理解できないが、お客さんはじっと聞いている。
 - ・ 民族舞踊の披露。一番印象的だったのは、民族衣装に身を包み、指輪で皿をカチャカチャ鳴らしながらリズムをとる軽やかな踊り。
 - ・ 古武道「シラット」の披露。やっとな雨のあがった芝生で、泥だらけになりながらの大奮闘。迫力と緊迫した演武、見応えがあった。
 - ・ 記念品の交換と写真撮影。
 - ・ 場所を変え、部屋の中でお茶とお菓子のパーティー。

23 : 20 ・雨あがりの中を、それぞれのホームステイ先へ向けて解散。

12月17日（月） （服装自由）

8 : 15 ○小学校視察

- ・順次団員をピックアップし、SAHARIMAN氏が副校長をしている小学校を訪問。
- ・売店形式の食堂で簡単な朝食。その後、校内見学。学校は月曜から金曜まで、土日曜は休み。授業は2部授業であった。
- ・教材準備室や図書室を見たが、その内容はとても貧弱で、先生も大変気にしていた。
- ・電気が故障しているために、蛍光灯は消えたまま、視聴覚教室も使えない、しかし、特別支障はないという。
- ・12歳の教室で、「日本のこと知っているか」と尋ねたが、手がほとんど上がらなかった。
- ・最後に校長先生に挨拶し、記念写真撮影。

10 : 10 ○テメロ地域教育局訪問

- ・局長 MAHUSSIN 氏の歓迎の挨拶の後、ロビーでお茶とお菓子の接待。会議室に移り、教育官 ZAKARIA 氏より概要の説明を受ける。

